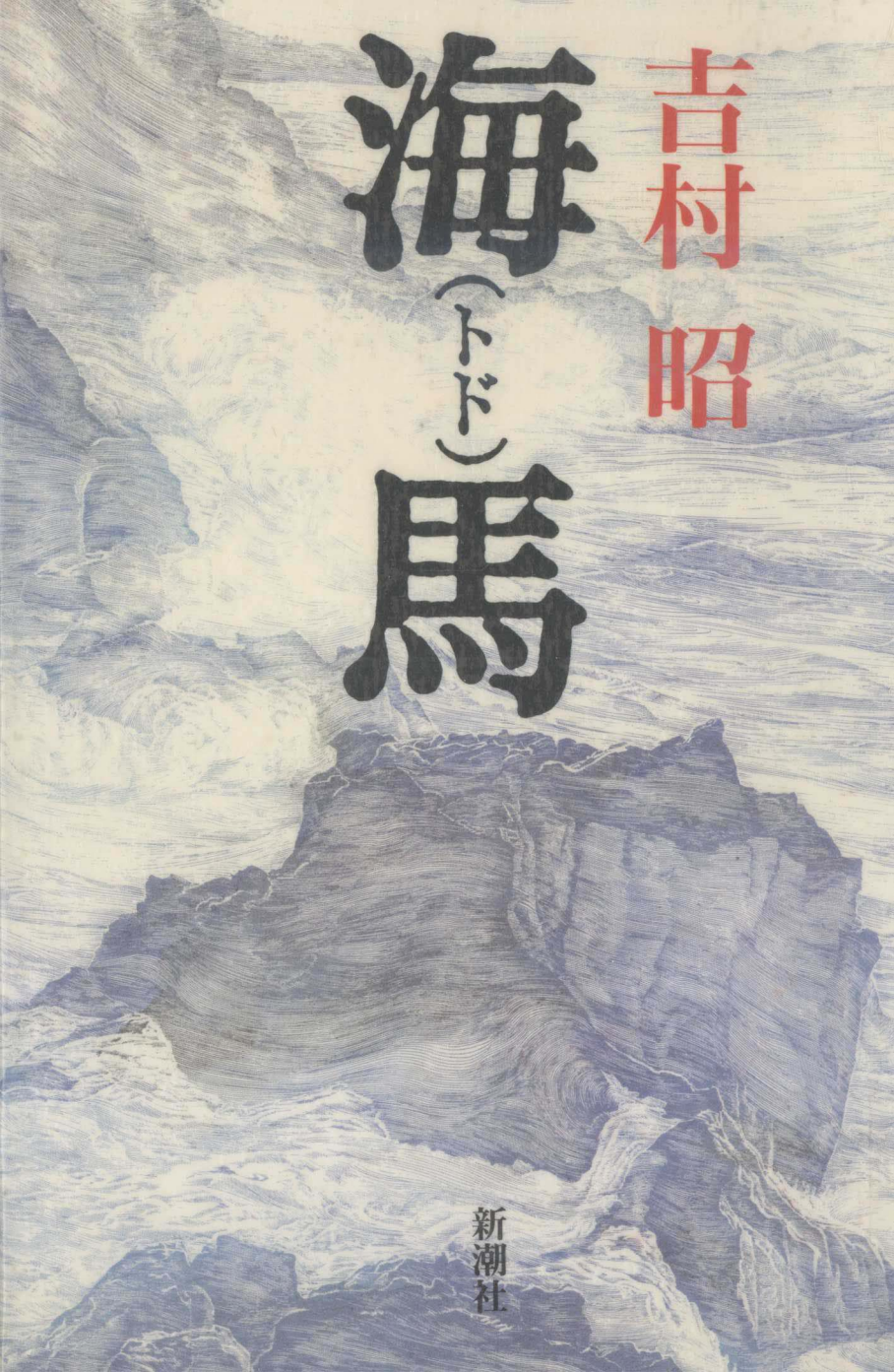




海

(下下)

馬

吉村昭

新潮社

海
(下)
馬

吉村
昭

新潮社



ISBN4-10-324220-5 C0093

© Akira Yoshimura 1989, Printed in Japan

海 (トド) 馬

一九八九年一月五日 印刷
一九八九年一月一〇日 発行
定価 一一五〇円

著者 よしむらあきら
吉村昭

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(03)二六六―五一―
編集部(03)二六六―五四―

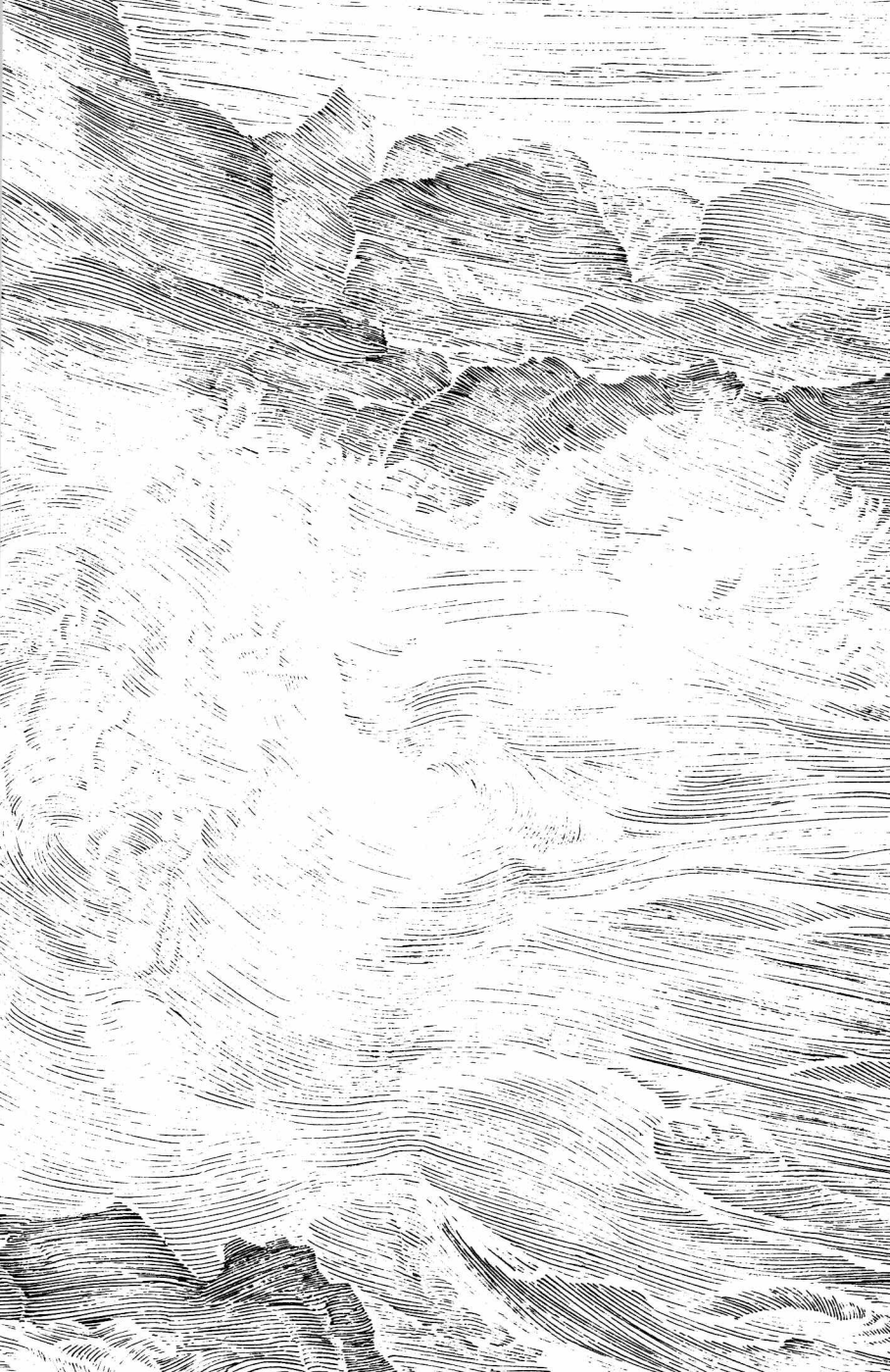
郵便番号 一六二

振替東京四―八〇八

印刷所 株式会社光邦

製本所 株式会社大進堂

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛
お送り下さい。送料小社負担にてお取替えい
たします。



目次

闇にひらめく	〈鰻〉	7
研がれた角	〈闘牛〉	39
螢の舞い	〈螢〉	75
鳴	〈鴨〉	111
銃を置く	〈龍〉	147
凍った眼	〈錦鯉〉	167
海馬	〈トド〉	187
あとがき		225

装
画
門
坂
流

海
(下)
馬

闇にひらめく

昌平は、店の椅子に腰をおろしヤスの手入れをつづけていた。

ヤスは、むろん魚や蛸などを突くU型の先端をもつ漁具だが、普通のものより二倍以上も長い。一般のヤスでは鰻を探るのに不向きで、工夫し改良したのである。かれは、U型に突き出した尖った鋼の先端を丹念に鑢で研ぎ、オイルを塗った。

桂子が洗い場で水の音をさせていたが、食器洗いも終つたらしく物音は絶えていた。

昌平は、ヤスと大きな手網を手に店の外に出ると、道を横切つて川岸に舫われた小舟に入れた。空には、一面に星が散っていた。

店にもどると、桂子が割烹着を風呂敷に包んでいた。電燈の光に、色白の横顔と、耳の付け根から首筋に流れるように染みついた赤い痣が、ほのかに浮き出ている。柱にかかった時計の針が、十一時近くをしめしていた。

桂子が、風呂敷包みを手に路上に出た。昌平は、電燈を消して外に出ると、店のガラス戸に錠をかけた。

「桜橋の袂でお弁当を用意しておきますから、明け方に……」
桂子が、言った。

「いいと言っているんだ。飯は店にもどつてから食べる」

昌平は、桂子に視線もむけず川岸に近づいた。小舟の中には、鰻採りの道具一式が載せられ、^と艀にはバッテリーに連結されたライトもとりつけられている。

かれは、舟に乗ると岸につながれたロープをとぎ、櫓をつかんだ。

舟が、岸をはなれた。

桂子が、こちらに顔をむけながら店の前に立っている。町の家並に、灯はまばらだった。

かれは、櫓を操った。舟は、川を下つてゆく。風はほとんどなく、岸をふちどる葦のそよぎも見られない。かすかに下流方向から磯に寄せる波の音がきこえているだけであつた。

桂子は、二日前から弁当を手に桜橋の袂に出ていると言ふようになった。その都度、かれは断わつたが、桂子は深夜起き出して弁当を作り、夜明けに橋の傍で弁当をかかえてかれの舟がやってくるのを待っているらしい。

かれは、意識して桜橋の下を流れる川筋を避け、そのまま店にもどることを繰返していた。弁当を受け取れば、自分と桂子との間柄は、店主と通いの雇人の域を越えたものになるにちがいない。かれの胸には過去の記憶が強く焼きつき、再び女を自分の生活の中に受け入れる気にはなれなかつた。

町の者たちは、それについてふれることはなく、自分の過去を知っているのかどうかわからな^い。三カ月前に桂子が勤めはじめてから、かれは彼女がそのことを知っているのではないかと表情をうかがっていたが、それらしい気配はみられない。ただ、日を追うて桂子の態度にあきらかな変化があらわれてきているのに、かれは気づいていた。時折り桂子の視線が自分に注がれ、そ

の眼にはすがりつくような光が浮かんでいた。

かれも、桂子の動きを自然に眼で追っている自分を意識して、うろたえることが多い。背の高い桂子の姿態に、優雅な女を感じていた。

桂子は婚期を逸しているが、それは首筋に染みついた痣のためであるようだった。働き口を探していた桂子を紹介した古物商の妻は、

「父親は幼い頃交通事故で死に、最近母親も亡くなって、ひとりになってしまつてね。氣立てのいい娘だから、頼むわよ」

と、言つた。

思い返してみると、その言葉の裏には、桂子を氣に入つたら嫁に……という意向がふくまれていたようにも思える。古物商の妻は、隣接した市の吏員であつた桂子の亡父の遺産もわずかながらあるので、桂子は細々と生活するには事欠かないが、徒食するのを嫌つて職を探しているのだ、ともつけ加えた。高等学校を卒業しているが、二十八歳の彼女に勤め口はないという。

昌平の店では、近くに住む老女が働いてくれていたが、午前十一時から午後十一時までの勤務がこたえるようになったらしく、暇をもらいたいと洩らすようになっていたので、桂子を雇入れたのだ。

鰻の焼き方を教えると、のみこみが早く、米飯の炊き方にもそつはない。客が声をかけると、澄んだ声で返事をし、常に笑顔を絶やさないので客の受けはよかつた。

桂子を妻に、と思うことはあるが、その都度かれは首をふる。自分には再び妻帯する資格はない、とかれは思っている。

時折り、一つの情景がよみがえった。広いガラス窓から射しこんだ明るい部屋に、白髪を七三に分けた小太りの男が、大きな机の前に坐っていた。

男は、出所おめでとう、と言ひ、

「これからの生涯を大過なくすごすように……」

と、言った。それは、出所者に繰返し口にする言葉らしく、抑揚の乏しい事務的な口調であった。

大過なく……という言葉が、出所してから月日がたつにつれて胸の底に根強く定着するようになってゐる。桂子を妻にしたいという気持は強いが、生活に変化が生じることにおびえを感じる。四年前の春、出所したかれは、安息を見出すため東京をはなれて中学時代の担任教師が隠棲していたこの町にやって来た。そして、生活の糧を得る手段として鰻採りをはじめ、小店を借りて鰻屋を開いたが、それからの日々は、文字通り大過ない生活だった。担任教師は昨年暮れに老人性結核で死亡し、身寄りと言へる者はいなくなつたが、町で一つしかない鰻屋なので客もつき、天然鰻を食べさせる店として隣接の市からも客が車でやってくるようになってゐる。町の人情は篤く、生活も安定してきているし、自分には分に過ぎた境遇だ、と思つてゐた。

おれには、鰻さえあればいいのだ、と、かれは櫓を操りながら思つた。少年時代から鰻の蒲焼きが好きで、大学を卒業してからそれを肴に酒を飲む楽しみも知つた。この町にやってきて担任教師であつた恩師から、川に鰻が多く、それを採つて生活している老人がいることを耳にした時、自分もその老人について鰻採りをし生計を立てようと思ひ立つた。

それがきっかけで鰻採りになつたが、かれは、鰻という生き物が好きになつた。鰻の生態が興

味深く、自分の手で採った鰻を料理し、客に提供することも楽しい。鰻は、他の魚類とは異つて脂の乗りが四季に関係なく一定していて味に変わりはなく、その上、どの季節にも採れることが好都合であつた。

川面には、わずかに星明りがひろがつているだけで、闇に近い。

川幅が少し広くなり、夜気に潮の香がかすかに感じられた。

かれは、櫓をゆつくりと操りながら河口に舟を進めていった。

二

担任教師が紹介してくれた鰻採りは、友成幸蔵という六十八歳の男であつた。

友成は、鰻採りの技術を教えて欲しいという昌平の申出をあつさりとは引受け、釣りでもやるかね、と言つた。かれは、昌平を鰻の多くいる場所に案内し、古い釣竿を貸してくれた。

鰻は光を嫌うので専ら夜釣りであつたが、一晚に十尾程度は揚げる事ができるようになった。餌は、ごかいであつた。

採った鰻は、市にある魚市場に売る。昌平は、友成の採った鰻もリヤカーにのせて市場へ運んだ。

友成は、突き専門の鰻採りで、ヤスで突く。町の者の話によると鰻を突いて採る漁師は近隣になく、他の地方でも稀ではないか、と言う。昌平には、どのようにして突くのか想像もつかなかった。

半年ほど夜釣りをつづけた頃、友成は、恩師の家の離室はなれを借りて住んでいる昌平のもとにやってくる、

「あんたは、本気に鰻採りになるつもりなのかい」

と、問うた。

「ほかのことをやる気はありません」

昌平は、答えた。気持が安まるので……と言いたかったが、かれは口をつぐんでいた。

深夜、岸辺に坐つて釣竿を川面にさしのべていると、気持が静まり、過去の記憶がいやされるような思いがする。都会で多くの人々に混つて働くよりも、ひとりで鰻を釣り、わずかながらも収入を得る方が自分には適していると思つた。

「初めは道楽かとたかをくくっていたが、どうもそうではないらしいな」

友成は、縁側に腰をおろした。

かれは、釣りで採れる鰻の量はたかが知れているし、それでは生活もできないだろう、と言つた。

「少しは貯えがありますし、そのうちに採るコツもおぼえてなんとか生活することもできるだろう、と思つています」

昌平は、考えているままを口にした。

「釣り専門では、なかなかむずかしい。重ねてきくが、本当に鰻採りになるのだな」

友成が、念を押すように言つた。

「私の性分に合っているように思えますので、これから長い間鰻を採つて暮したいと考えていま